

研究課題

地域の映像制作を通して取り組む表現力の育成

副題

学校名	岡崎市立井田小学校
所在地	〒444-0077 愛知県岡崎市井田町茨坪4-3
学級数	34
児童・生徒数	1,114名
職員数/会員数	45名
学校長	柴田 秀夫
研究代表者	柴田 秀夫
ホームページ アドレス	http://www.oklab.ed.jp/weblog/ida/



1. はじめに

本校は、児童数1,100名を超える、県下でも有数の大規模校である。しかし大規模校であっても、地域社会の風の中で、地域の人々とともに、子どもたち一人一人に目を向けた教育を推進したいと考えてきた。その流れの中で、今年度からは「共感・共学・共生」の3つの「共」の学び舎作りをテーマに、学校づくりを進めている。

子どもたちにおいては、「にこにこ・こつこつ・もりもり」の行動目標を掲げ、「笑いの生まれる学年学級づくり」「意欲を持って学び続ける授業づくり」「やりぬく心と体づくり」を各学級において進めてきた。また、「共感」「共生」においては、地域の中に子どもたちの学びの場を求め、地域の方とのふれあいや地域に働きかける子どもたちの活動を通して、子どもたちの生きる力を伸ばしたいと考え、各種の実践を行ってきた。

本研究では、このように活動場所を地域に求め、地域を調べる中で多くの人と関わり、表現力を育成することで、本校の目指す「共感・共学・共生」の3つの「共」のある学び舎作りを進めていきたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、以下の内容を主な目的として行った。

- ①子どもたちが、自分自身で地域に根差した映像作品を制作する活動を通して、身近な事象の理解や問題解決の力を伸ばすことができるようにする。
- ②映像作品制作の過程で必要となるメディアリテラシー（言

語力・情報理解力・メディア活用力）を高めることにより、子どもたちのコミュニケーション能力を含む表現力を向上させる。

- ③子どもたち自身が制作した映像作品を素材とした「映像地域データベース」の構築を進める。

3. 研究の方法

(1) 育てたい力の定義

本研究では、地域の映像制作および映像データベース作りを進める中で、子どもたちの表現力を高めるポイントとして以下の3点を定義した。

①言語力

- … 自分の伝えたいことは何なのかを明確にし、伝える相手に合わせて言語化・可視化する能力

②情報理解力

- … 相手とふれあいながら、相手の考えていることを感じ取ったり、読み取ったりする能力

③メディア活用力

- … 有効な言葉や手段を活用して、自分たちの思いを確実に相手に伝えていく能力

(2) 本校の特色

本校は、パナソニック（株）が全世界的に開催している教育プロジェクトであるKWN（キッド・ウイットネス・ニュース、写真1）参加校である。本校は平成18年度から同プロジェクトに参加し、5年連続で入賞（内2回は最優秀作品賞）という成績を収めるなど、活発に映像作品の制作を行い、

高い評価をいただいている。またその制作過程などについては共同通信社や中日新聞社、福山大学などから取材や問い合わせを受けている。

本研究における6年生の映像制作グループは、KWNのように質の高い1作品を作るだけではなく、少人数で、できるだけ多くの人と地域を撮影対象として取り上げ、作品づくりをすることで、地域映像データベースの構築を進めたいと考えた。



写真1 2010 Global Contest

4. 研究の内容・経過

(1) 映像制作に対する興味付け、オリエンテーション

これまでの井田小の活動や、世界のKWN参加校の作品を紹介することで、研究対象となる子どもたちの意欲・関心を高めるとともに、制作の過程で必要となる著作権・肖像権についての学習を行った。また家庭訪問や授業参観等の機会を利用して、保護者向けに映像制作活動についての周知をするとともに、肖像権の処理について了解を得た。

(2) 映像制作活動「30秒CMをつくろう」

子どもたちがごく身近な生活の中から、「みんなに伝えたい」というテーマを選び、30秒間のCMにまとめることで、自分の意見を端的に映像表現することを学ぶ機会とした(写真2)。



写真2 30秒CMの制作

ここでは特にコンテ作りに重きを置き、多くの時間を割いた。「相手に伝えたいことは何か」をまず文字にして明確化し、それを起承転結の順序でより伝わりやすいコンテに仕上げる作業を行った。この言語活動をしっかりと行うことにより「言語力」を養うことを目論んだ。

(3) 映像制作活動「『後世に残したい井田学区』を紹介しよう」

地域の人々とのコミュニケーション、社会のマナー、環境、防犯など、子どもたち自身が自分たちの学区について「すばらしい」と思うことをテーマにした作品を制作することにより、普段見慣れたものを見つめ直し、そこに自らのメッセージを加えて映像化した。ここでは、撮影・編集のメディアを活用した表現活動を進めるとともに、メディアリテラシーを高めることをねらった。

A子はどちらかといえば対人コミュニケーションが苦手、人前に出ることを避ける傾向があった。しかし学区の神社に

出かけて行った神主さんへのインタビューでインタビュアーを経験したことで自信を持ち、その後も神社に参拝に来る学区の方々へのインタビューを行うことができるようになった。さらに後述のKWNの作品制作では、英語指導助手に対してインタビューを行い、相手の話の内容に沿って質問をしていくことで、作品のテーマにもなった「We can do anything!」という言葉を引き出すことに成功している。

(4) KWN向けの作品制作

これまでの作品制作で学んだことを生かし、KWN向けの作品制作を行った。ちょうど社会科で国際紛争について学んでいたこともあり、作品のテーマは「平和」に決まった。さらに同時期に愛知県で開催されていた



写真3 クレイアニメの制作

「COP10」のメインテーマ「生物多様性」から、「生物多様性の保障＝人間の多様性の保障」を切り口として、戦争をなくすための方法について表現しようということになった。

この活動では一つの作品に対して学級全体で取り組むことになったので、一人一人をどのように作品制作に関わらせていくかが大きな問題となった。そこで実際の編集活動や出演には選抜メンバーが参加し、クレイアニメーションやラストシーンなど多人数でできることは全員で取り組むという方法をとった(写真3)。作品は最優秀作品賞こそ逃したものの、高い評価をいただくことができ、子どもたちも満足そうであった。

B男は、1・2学期の映像作品制作に大変意欲的に取り組み、KWNの作品制作にも大きな意欲を見せていた。しかし、チーム内においては自分の意見を最優先させる傾向があり、それが元でチームの他のメンバーといさかいを起こすことがあった。クレイアニメーションの制作では一コマずつ人形を動かして撮影する都合上、人形の動きやコマ割について事前の綿密な計画が必要となる。B男はこの活動を通して必然的に他の子と会話をして共通理解を図る経験をし、図1のような感想を残した。

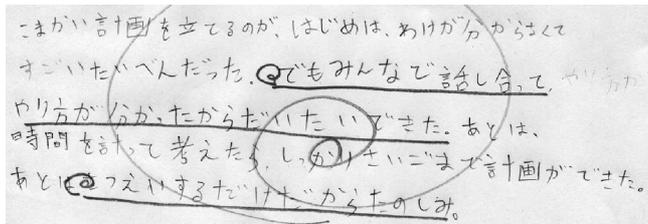


図1 B男のワークシート

(5) 作品発表会「私たちの町『井田』を見つめ直そう」

完成した作品をまとめて、児童数分DVDに収録・配付し、児童自身が保護者をはじめとする学区の方々へ作品を紹介し

た上で観ていただくことで作品を通じた交流を行った。また1月には本助成とは別にパナソニック教育財団より研究委託を受けていたハイビジョンによるテレビ会議システムを使い、市内の他校（岡崎市立常磐・岡崎市立六ッ美中部小学校）の6年生に向けてプレゼンテーションを行った。

(6) 作品修正および地域映像データベース化

地域の方々や他校の児童から得られた意見を元に最終的な作品の修正を行った上で、「後世に伝えたい井田学区」地域映像データベースとして教材化を行った。計画ではWeb化を考えていたが、学校HP上での運用に際してデータ量の問題が実践時においては解消できなかったため、現時点では暫定的にメニュー付のDVD-VIDEOとなっている。次年度には実際に他学年（3年生の地域学習、4・5・6年生の総合的な学習）における学習素材として活用を予定している。

5. 研究の成果と今後の課題

(1) 映像制作による表現力の向上

子どもたち自身が制作者となることにより、表現力を向上させることができた。

- ① コンテ作成や自分の思いを表現する映像とは何かについて考えることにより、自分の言いたいことを視覚化・言語化する言語力を養うことができた。
- ② コンテを制作する活動や、学区の方々へのインタビュー、テレビ会議などでのプレゼンテーション活動、学級内での作品検討会を通して、被写体となる人物や作品を観る者の思いを読み取ったり、他者の作品を批判的に理解したりする情報理解力を養うことができた。
- ③ 効果的な映像表現を意識しながらカメラなどを操作して撮影する活動や、パソコンなどの各種機器を駆使して作品を編集する活動、KWNの作品制作においてクリエイティブアニメーションを制作する活動などを通してメディア表現力を養うことができた。

(2) 対人コミュニケーション能力・自己表現力の向上

映像作品の制作過程において、インタビューなどの「対人」のコミュニケーションは不可避である。実際に「『後世に伝えたい井田学区』」やKWNの作品制作では、子どもたちは複数回のインタビューを経験している。

前述のA子の姿からも明らかなように、子どもたちは初めは不慣れであっても、経験を重ねていくうちに、取材対象者の心の動きを感じ取りながら質問して話を聞くことができるようになったり、自分の言葉でレポートできるようになった。またB男のように、仲間内での対人コミュニケーションの経験を多くすることで、他と協調していく態度をも養うことができた。

このように映像作品の制作を経験することで、子どもたちの対人コミュニケーション能力は大幅に向上したと言える。

(3) 地域に関する映像をデジタルアーカイブ化することによる地域の魅力の再発見

「後世に伝えたい井田学区」を映像化する活動を通し、子どもたちは自分たちの住む地域を見つめ直すこととなった。それは普段からよく目にしていてものを新たな視点で見直し、言語化・映像化する経験であり、自分の住む地域の魅力を再発見することであった。さらにその作品を学区の方々や他校の同年代の児童に観てもらうことで、観る人々にとっても自分たちの住む地域に対する再発見を促すことにつながった。それは作品について学区の方々からいただいた「自分たちの身近にある『守っていくべきもの』を見直す良い機会になった」「自分たちの町を愛する気持ちをこれからも大切にしたい」などのコメントからも読み取ることができる。

さらに本研究では、そういった地域映像の記録を子どもたち自身が自分たちで使いながらさらに変化を積み重ねていく、いわば「成長する」デジタルアーカイブの端緒を開くことにもなった。取材対象が地域の祭りや神社仏閣、風景、環境に至ることから、本研究自体が「子どもたちの手による文化の継承」としての大きな価値を持つことになったことも特筆すべき点である。

(4) 課題

現時点で最大の課題となっているのは、本研究で端緒を開いた、「子どもたち自身が活用し、育てていくことのできる」地域映像のデジタルアーカイブの蓄積を、今後いかにして継続させていくかである。また同時に蓄積された映像にどのようなタグを付け、データベース化していくかについても、今後の運用も考えてシステム化する必要がある。これが今後うまくいけば、このデータベースは文字通り「地域の財産」となることができると考える。

「だれでも簡単に、いつでもできる」システムの構築のために、今後も人材面・機器面についてより拡充を図っていきたいと考えている。

6. おわりに

本研究では、子どもたちの手による映像制作の過程で要求される人々との関わりや様々な事柄が、表現力の育成に結び付く学びとなると考え、実践を進めてきた。その結果、子どもたちに「言語力」「情報理解力」「メディア表現力」3つの力を柱とした表現力をある程度育てることができた。今後も是非継続して助成を受けながら、本研究を継続して進めていきたい。

参考文献

「カナダのメディアリテラシー教育」（上杉嘉見、明石書店、2008）